
作品集「お茶をにごす！」

浮羽ゆ-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作品集「お茶をにごす！」

【Nコード】

N2197M

【作者名】

浮羽ゆ -

【あらすじ】

しばらく留守にしがちなので、季節ネタ集でお茶をにごしときますです。

それにしても今年の夏は暑いというか、蒸し蒸ししますね。

テニスボーイの憂鬱？【コメディ】

> i 8 5 0 6 — 8 6 3 <

2007年初夏。テニスの聖地、ここ英国ウィンブルドンでは、世界4大国際ツアーの中でも最も権威のあるトーナメント大会が開かれようとしていた。

前年度のチャンピオンと決勝戦でしか使われないという、栄えあるセンターコートでは、女子シングルの開幕試合が今まさに始まろうとしている。

試合開始寸前の興奮が収まらぬ観客に、審判が「ブークワイアツト（静かに）」とマイクを通して伝えていく。

選手二人を試合に集中させるためだ。

ボールボーイ二人も神聖な面持ちで、ネットの脇でしゃがみこみ構えている。

「おい……」

「……」

「……おいってば！」

「何だよ？」

隣で同じようにしゃがむ、同世代のボールボーイが小声で話しかけてくる。

そいつは、この大会で初めて顔を合わせたが妙に人懐っこく、試

台前からしきりに僕に向かって話しかけてくる。

「なあ……、ちょっとしゃべろうや」

「何でだよ、試合始まるぞ」

僕は、少し離れたところに立っている副審達にバレないように、顔はまっすぐネットのライン方向を見つめたまま、小声で返す。

「だって、暇なんかあ2時間強も、しゃがみっパで、ボールが網に掛かったら小走りでひらいにゆくだけの、単純作業やんか」

「ば、馬鹿！ これは格式あるウィンブルドンのセンターコートだぞ、お前何でボールボーイなんか応募したんだ？」

「だって、ちょっとカッコいいやんか、この濃紺の衣装着て、ちらっとテレビなんか映ったろうかいな思おてな」

「なんでお前なんかが受かったんだ？」

「なんで……？ ルックスちゃう？」

レットオ！

そのとき、主審が叫んだ。

コート内にボールが緩やかに転がる。

僕は颯爽と駆け出して、コート内のボールを拾うと反対側の主審台の下にたどり着き、その場で試合を観戦する。

コートの向こう側ではアイツが小さく手を振っている。

（手を振るな！）

そして、試合は徐々に進んでいく。

僕は、ことさらにアイツを無視した態度を決め込んでいたが、あいつはそんな僕の思いを知ってか知らずか、審判達に見つからぬよう鼻を指で押さえてブタの真似をしたり、目に指を当てて見開いた

パフォーマンスをしていた。

（調子に乗りやがって……）

そのとき、前回チャンピオンのサーブがネットに掛かりサーブエリア内に転がった。

「レット！」

主審が叫ぶ。

しかし、僕は一瞬アイツのことに気を取られていて出足がおくれた。

すかさずアイツはダッシュして、コート内に突入し、転がっているボールを軽やかに拾いあげた。

だけど、僕は見たんだ。

アイツがボールを拾いあげる瞬間を。

その時あいつはカメラの位置を確認し、反対の手を腰の辺りに添えたまま、小さなピースサインをレンズの方に向けていた。

「おまたせ。 退屈やったやろ」

主審台を挟んで、同じく待機の姿勢を取ったあいつは、間髪入れずに小声でそう言った。

「……話掛けるな、審判に聞かれるぞ」

僕は精一杯の拒絶の態度を見せる。

「これくらい聞こえへんよ。それに、寂しかったん」
「知るか！」

「ほお、そういう態度ですか？」

「当たり前だろ」

「じゃ、さっきのパフォーマンスの続き、ココでおもいつきしやつたろ。周りの人間はどう思うかな？」

「どうって？」

「お前も仲間やと思うんちゃうか？　すぐ側で笑ってたら」

「笑いひんよ」

「どうかな？　さっき思いつくそニタニタしてたやんか、自分」

「……してた？」

「してたよお、ヤンチャしがいがあつたで、ほんま」

「ほんまに？　そらマズイな」

「やろ？　……だからココは一つ」

「うゝん」

僕は悩んだ。

しかし、アイツの言う通り、神聖なるウィンブルドンのセンターコートで、ニタニタしながら試合観戦するボールボーイ。というレッテルを貼られるのは非常にまずい。

「わかったよ。話を聞けばいいんだろ」

「おおきに！」

「ところで、お前微妙に方言入り混じってんなあ」

「ああ、わて河内と三宮のハーフやねん」

「そんなハーフ言えへんわ」

「そう、そのツツコミが欲しかったん」

「いいから続けるよ」

「いやーどうも」

アイツは音が鳴らないように、拍手する振りをしながら期待する

目で僕を見ている。

「……ど、どうもー」

(僕も乗っかれということか?)

「いやー、ほんま暑いすね」

「もうすぐ夏やからね」

「夏近いーゆうても、まだ6月の終わりですよ」

「そうやねー」

「ほんま、6月終わりでこの暑さですから、これで12月にでもな
つたら……」

「なつたら?」

「……メリークリスマスやね」

「いや、そこは『どれだけ暑いんやろ?』言つとかんかい!」

「ほんまにねー」

「……ほんまやわ」

「いやー、今年も残すところ6カ月弱となりまして」

「長いわ! 6ヶ月って…… 半年も残つとるやないか」

「ええ、ええ、残ってます残ってます。大相撲の行司並に残ってます言いますよ」

「どんな例えやねん、早よ先進めや」

「そうそう大相撲と言えば、ウインブルドンの季節やね」

「初夏と言えばやる、お前が脱線さすから話おかしなとるやないか！」

「ほんま、どんだけ暑いやんろ？」

「だから、おかしいって」

「で、話は戻りますけど」

「ああ、戻せ戻せ」

「ウインブルドンと言えばテニスコート」

「そうですねー、今まさに眼前に広がっておりますけど……」

「そうなんです、みなさん。僕らこう見えてもボールボーイなんて職務を、申し付けられておりましてねえ」

「こう見えてもって、どこからどう見ても、ボールボーイの格好ですけど……。そうなんです、みなさん。僕ら格式あるウインブルドン選手権のボールボーイやらさせて貰ってますねん。しかもなんと

……センターコート！」

「センターコート、これがどれだけすごいかわかります？」

「そう！ 言うたげて！ どれだけの格式か」

「ウインブルドンでは、一年に一回。この大会でしかセンターコ―

トを使いませんねん」

「そう一回だけでえゝす！」

「しかも、大会中も前年度チャンピオンの登場する試合と、決勝戦
だけしか使われません」

「そう、あのお方しかこんな特例は認められません」

「そして今日僕達がいるのが、なんと！ 栄えあるそのウィンブル
ドン本選のオープニングカード。この、まばゆい光に包まれたセン
ターコート」

「そう黄金色に光り輝いております」

「……？」

「ガンダム史上、類を見なかったその黄金色の機体。メカニックデ
ザインは実はエルガイム、ファイブスタ……」

「おい！」

「え？」

「何の話してんねん」

「何の話って…… 百式の話やん。知らんの？ ズガンダム。クワ
トロゝバジーナ大尉の専用モビルスーツやん」

「はあゝ？」

「ところでシャアは最後なんでジオンの息子の証明である、キャス
バルゝダイクンの名を名乗らずシャアの名でネオジオンの総帥にな
ってんやろ？」

「知らんわ！ なんやねんガンダムって？ ここはウィンブルドン
！ 見てみい。お客さんポカーンとしてはるわ！」

「ほんまやねえ。なんや、みなさんZはガンダムとして認めない派
なんや？」

「違うわケえ！ ここはウィンブルドンのセンターコート」

「そう。だからここでは、たとえシャアでも、白を基調とした機体
にしか乗れません」

「ちゃうわ！ そらウェアは確かにそうやけども…… なんてボールボーイ二人が主審台の下でガンダム話に花咲かせなあかんねん」
「ほんまやねえ」

「……そやるがい。わかつたら話、元に戻して」

「ほんじゃあ話、戻します。ウィンブルドンと言えばセンターコート」

「そうそう、それやがな。ウィンブルドンと言えばセンターコート！」

「センターコートと言えば……」

「センターコートと言えば？」

「……アンダースコート」

「ちよつ待てえ！」

「何やねん？」

「何やねんあるかあ！ 何がセンターコートと言えばアンダースコートやねん」

「変かあ？ 目の前ヒラヒラさせ取るやないかお姉ちゃん達ふたりが」

「お姉ちゃん達二人？ ……プロや！ しかも前年度チャンピオンや！ そこの学生サークルみたいな言い方すな！」

「いや、そら失礼」

「そう、失礼やわ」

「でも、自分アンダースコートに偏見あるんちゃうか？」

「偏見って何やねん」

「アンダースコートを差別してるってことや」

「別に差別なんかしてへんよ」

「ホンマかあ？」

「ああ、テニスウェアの一つやないか。ただ、お前の言い方がやらしいねん。なんや……『目の前ヒラヒラさせとる』みたいな言い方が」

「じゃあ聞くが。アンダースコートは下着か？」

「……いきなり、なんやねん」

「ほら見てみい。つまりその、考え方が差別や言うてんねん」

「じゃあ、お答えします。アンダースコートは下着ではありません」

「なんで？」

「なんで？って、あれは女性の下着を隠すためにその上から履くもんやからです。淑女のたしなみです」

「ほんなら別に、ええやないか別にヒラヒラさせとるの見たって下着ちゃうんやろ？」

「ちやうけどもな、あれはアンダーって付くくらいやからスコートの下に履くもんやろ」

「そやなあ」

「スコートの下に隠してる物を、動きの中でチラッと見えたかってそれを、ことさらジロジロ見たり、そこだけクローズアップするってのは紳士としてアカンやろ」

「関西弁でアカンやろ言われてもなあ……」

「じゃあ、いけず」

「何か、そう言われるとそそるわ。昔、国語のテストで擬音語を四つつ書けてののの一つにそれ書いた気いするわ」

「京都の祇園ね」

「もう一つは『一見さん、お断り』」

「あとの二つは？」

「……つうか、話戻すけど。それやったら最初からスコート脱いどけばええやん。アンダースコートで試合すればいいやん」

「それやったらオムツみたいやろ。なんやパンパース付けた若い女二人がテニスボールの打ち合いしても美しくないからなあ……」

「ほらな。それが偏見やゆうてんねん……なんやねん美しくない。つて。外見で人を判断してると言うのはそういうこつちゃ」

「……すまん。でも、そうやろ？ アンダースコートつつうのは隠れてるものがチラッと見えるから、なんか、そそるねん。開けっぴるげに見せられてもハイそうですか。つて感じやろ」

「おお、ぶつちやけたな。そやねん。だから、アンダースコートつつうのは下着じゃないねん」

「ほお」

「かといって上着でも無いねん」

「そりやま、そやろな」

「それじゃあ、何か？ と問われたらやな……」

「何？」

「あれは、思春期的衣服やねん」
「思春期的衣服？」

「そう。あのアンスコのヒラヒラって、何やと思う？」

「ヒラヒラ？ あれは飾りやろ」

「飾りって自分、ア・バオアクーの技術者か？」

「なんやねんそれ。じゃあアレか？ 隠すための布やろ。はじめから厚いと動きにくいからヒラヒラさせとんねん。な、そやろ？」

「正解！ つまりは、そういうことや。あれはカエルでいう、おたまじゃくしに生えてきた足や」

「何やねんな、ソレ」

「つまり、水の中で生活していたおたまじゃくしが成長して地上でも活動できるように足が生えてくる。それが、あのヒラヒラやねん」

「……なんや、ようわからんけれども」

「わからんか？ やつはまだ地上では生きられへんねん。かといって足が生えた以上もう、おたまじゃくしでは無くなりつつあんなん。そういう思春期的な思想の衣服やねん」

「……なんか、わかる気もするけど」

「オレは声を大にして言いたい。あいつらは自分をもてあましてんねん。体は大人、でも気持ちはまだ子供。足が生えてきて図に乗ってるけど、まだまだ一人立ちは出来ひんねん。しかも、いずれ自分の尻尾がなくなっていくことに気付きもせず、時には体の色、時には生えてきた足を見せびらかして自分を使い分けて周りに認めさせる。あのアンスコのヒラヒラにはそういう、おたまじゃくしの足的な甘えと、懐かしい憧憬が詰め込まれとんねん」

「なるほどなあ、でも……」

と、さらに突っ込んだ質問をしようとしたとき、急に僕の体が得

体の知れない力で頭上に引き上げられた。
隣を見るとヤツも、がたいの大きな警備員に首根っこをつかまれて担ぎ上げられジタバタしている。

*

……センターコートの実況席。

BBCのアナウンサーがマイクに向かって喋っている。

「試合開始から1時間足らずですが、栄えあるウィンブルドンの開幕試合でセンターコートから、今大会で最初に去っていく者が決まりました。……それは、前回チャンピオンでも挑戦者でもなく……ボールボーイの二人です」

解説者が口を挟む。

「ま、この一方的な試合展開よりは面白かったですけどね」

「おおっと、ここで観客席から、スタンディングオベーションでコートを去りゆく二人に拍手が送られます」

*

そして、審判がマイクに向かって、観衆に囁いた。

「プリーズ！」

……
「ビー
クウファイアット」

テニスボーイの憂鬱？ 【コメディ】（後書き）

しばらく留守がちになりますm（――）m
感想設定は切っておきます。

安西先生…… バスケがしたいです 【パロディー】

安西先生…… バスケがしたいです。

神奈川県中学MVP男、三井寿は3ヶ月前、2年のブランクを経て湘北バスケット部に戻った。

もう… 二度と、この連中に迷惑は掛けられない。

8月2日早朝、広島…

いよいよIH^{インターハイ}一回戦の日が来た。

湘北高校バスケット部員達は、皆マイクロバスに乗り込み会場に向けて宿を出発する。

しかし……。

胃がせり上がり嘔吐感がこみ上げる。

激しい車酔い。

朦朧とした意識の中、マネージャーの彩子が後部座席の赤木に報告に行ったことに気付く。

「脳貧血のような感じ。水分補給が足りなかったみたい。……この移動中にはもう」

「くっ……」

年下のクセによく気が付く女だ。

ところが引率者である安西先生は、運転手のすぐ後ろに座り、桜

木花道となにやら戯れている。

「やっと監督らしくなってきたなオヤジ」

「そうかね。ほっほっほ」

桜木は先生のアゴのたるんだ肉を触ってタプタプしている。

オレは突っ込みを入れたところだが、車酔いで体力が削られている。

ホワイトヘッドデビル

白髪鬼安西監督。今は仏と言われているそうだが決して油断はできん。

移動に使った車両で、湘北バスケット部員が嘔吐汚損事件。バレリや弁償。

確実に清掃させられて、下手すりゃ試合に間に合わなくて棄権負け。

…その責任を取らされて廃部ってこともありえるよな。

「…廃部」とオレは呟く。

赤木への報告を終えて自分の席に戻ろうとした彩子は、それを聞きつけたのか捨てゼリフを残して、俺の席を通り過ぎた。

「…汚い男」

（何だと！先輩に向かって）

そこへ、一年の桑田がやってきた。

怯えながらポカリスエットの缶ジュースをオレに差し出す。

オレは素直に受け取った。

しかし不安はあった。三井の不安要素その1、腕が震えてうまく飲めない。

しかしオレは強気で言った。

「一本飲めば流れは変わるはずだ！ まだ闘える！」

そう桑田に伝えると、ざわつき始めた車内の部員達に向けて叫ぶ。

「静かにしろい。この音が… オレを甦らせる。何度でもよ」

オレは缶ジュースのプルトップを開け放った。

プシュツッ！ ゴクゴクゴク。

いい感じた。気分が落ち着いてくる。

体のバランス。指先のプルトップへのかかり具合。手首のかえし。ピシヤリだ。

こぼす気がしねえ。

「バカタレが！ …スクリーンアウトはどうした！」

その刹那、後部座席から赤木が叫ぶ。

（ん？……ぬおっ）

赤木の言葉の意味に気付いたと同時に、再び嘔き気がオレを襲った。

「リバウンドだ！」

オレは必死のディフェンスで、喉元まで出掛かったそれを胃袋に戻す。

「ナイスディフェンス！ 錆び付いちゃいなかったか」

と赤木は言った。

「もうないのかポカリ？」

オレは突っ立ったまま俺の様子を見守っていた桑田に告げる。

「あ…と、取ってきます」

そう言って、急ぎ自分の席に戻る桑田。

しかし、次のポカリを受け取ったとしても、オレはもう腕が上がらない。

ふーっ。

ため息が出る。

「オレに中学以上の体力があるはずもねえか。中学の財産だけでやってるようなもんだからな」

（くそ……なぜオレはあんなムダな時間を…）

そんなオレを見かねたのか、ポカリを探して荷物を漁る1年の桑田、石井、そして…佐々岡？を制して、メガネの小暮がやってきた。

「もう、いいだろ。大人になれよ三井」そして車内の皆に向けて語り始める「三井は車酔いする体質なんだ」

「え？」

ざわつく車内。

「オレたちの学年でバスケをしていて、武石中の三井寿が乗り物に弱いことを知らないものはいなかったよ……」

小暮は続ける「そのときは想像も出来なかったよ。三井とこんな

風にバスに乗るなんて……」

「やめろ小暮、関係ねー話は！」

オレは叫んだ。

しかし小暮は構わず続ける「本当にすごかった。まるで機械のよう
に正確だったんだ。5分置きに吐きまくってた」

オレは立ち上がり叫んだ！

「バツカじゃねーの！ バス酔いなんて、もうオレにとっちゃ思い
出でしかねーよ。バス移動なんて単なる交通手段じゃねーか。酔わ
なくなつたから乗ったんだ。それが悪いか？」

小暮はオレをたしなめるように言った。

「もうよせよ。三井」その目は眼鏡の奥で少し涙ぐんでいた「お前
は根性なしだ。根性なしのくせに…… 夢見させるようなこと言っ
たな！」

そうオレに言い放つと、前方の座席にいる安西先生に向かい。

「先生。車を停めて三井を休ませた方が。もしバスを汚したりなん
かしたら……」

「ほっほっほ小暮君。こんなところで満足してもらっちゃ困る」

その時向かいの座席で、眠っていたはずの流川が、普段はクソ生
意気でにくたらしくて無愛想で生意気で無口な流川が言い放つ。

「あの人が、そんなタマかよ」

信頼……？ 湘北にそんな言葉があつたか？

……いや。

「お前らオレを信じていいのか？ 吐いたら試合に間に合わないぞ！」

「うるせーそんなもん」と叫ぶ桜木。

「ごまかす！」

「もみけす！」と流川も続く。

安西先生は小暮に言う。

「後悔の念が強い分彼は、今の自分を責める傾向がある。だが、そろそろ自分を信じてもいい頃だ」そしてオレに指示を与える「三井君。吐き気を抑えてくれるかね」

ニヤリ。

「やりましょう」

「さあここだ根性見せろよお前ら！」
とキャプテンの赤木が吼える。

オレは思う。

「こんなところで負けて溜まるか。オレが吐いたせいで棄権負けなんてしてたまるか」

すかさずシロート桜木が口出しする。

「ミッチー。やっと出来たぜオヤジが言ってたのが…」

それは、昨日のミーティングの安西先生のお言葉だった。

「全国制覇を成し遂げたいのなら、もはや、何が起きようと揺らぐことのない……断固たる決意が必要なんだ!!」

桜木は言う「やっと……ダンコたる決意ってのが出来たよ」

炎の男、三井寿はその言葉に乗った。

「そうだった。MVPを取ったときもそうだったはずだ……こういう展開でこそオレは燃えるやつだったはずだ」

プシュッ　ゴクゴク

「さっさと続きを始めるぞ。オレの気持ち醒めないうちにな!」
俺の言葉にみんなが活気付く。

「下げるな　開けるぞ」

「おう」

「「オレたちは強い!」」

しかし、小暮は冷静に呟く。

「三井……お前はもう限界のはずだ」

その声は、オレの耳に届いたが、オレはそれを振り払い言った。

「ここで働けなけりゃオレはただの大バカヤロウだ」

そして再び、ポカリをのどに流し込む。

「無理すんなよ三井、もし……」

「絶対すぐ回復するぞオレは、見てろよ小暮」

「吐き気がねえ、吐き気がねえぞ。イケる」

「河田は河田。赤木は赤木。そしてオレは… オレは誰だ？ オレ
は誰なんだよ、言ってみろ！」

2年のPG宮城が言った。

「ヨロヨロじゃねーか。なのに…」

*

朦朧とした意識の中で、オレは過去を回想する。

「湘北の安西先生がさ…」

それは一年のとき、小暮に教えた台詞。

「最後まで…… 希望を捨てちゃいかん。あきらめたらそこで試合
終了だよ。ほっほっほっ」

オレは、その言葉で中学県予選決勝を逆転勝ちし、全国に進むこ
とが出来たんだ。

*

「宮城オレにポカリを使え…」 ……うぷっ。

「使えつたつてな…… ポカリはもう無いよ。しかも …… うぶつて
とりあえずアクエリアス渡しておくか。」

「オレの名前を言ってみろ！ オレは誰なんだよ！」

戸惑いながらも宮城は答える。

「三井…… さん」

「おう！ オレは三井。あきらめの悪い男……」それにしても… 目
がチカチカしやがる。体力ねえなオレは… タバコは吸わなかった
んだけどな、一度も。

オレはもう、このバス酔いを、止められねえ。走ることも抜くこ
とも何もできねえ。オレからポカリを取ったら何も残らねえ。

「もうオレにはプルリングしか見えねえ」

オレはポカリの蓋を開け、腰に手を当て一気に喉に流し込む。

「ふむ… きれいなフォームだ」

そう言いながら座席を立った安西先生が前方から近づいてくる。

（安西先生！）

オレは、ゆっくりと近づいてくるその姿を見つめる。

その姿は、まるでカーネルサンダース。しかし、涙が滲んでうま
く見えない。

（安西先生！）

「恩返しがしたいんだ」あの時、オレは小暮にそう言った。
今でもその気持ちに偽りはない。

（安西先生！）

オレは自分の本当の気持ちに気が付いた。

安西先生が俺の前までやってきた。
オレは床にへたり込む。

そして、涙で瞳を潤ませたオレは、先生を見上げて、懇願する。

「安西先生……！！」

バス汚けがしたいです」

＊

「三井君。いいからイスに座りなさい」

「え？ ……で、でも」

三井のその曖昧な返答に、白髪が逆立ち、豹変する安西監督。

「聞こえんのか？ あ？」

（…え？ ……ここで、白髪鬼 ……ですか？）

20分後、予定時刻よりもずいぶん遅れて会場に到着した湘北のマイクロバス。

そこから真っ先に飛び出した三井寿は、口を片手で押さえながら玄関に飛び込み、トイレを探して、急ぎ駆け込む。

「速攻だー！」

そこには用を足し終え、ちょうど手を洗っていた神奈川ナンバーワン海南大付属の牧がいた。

「焦ってるな三井。リバウンドに対応しようとして」

そんな牧に目もくれず、奥にある個室トイレのドアを、開けようとしたその瞬間。

少しの安堵感がオレの緊張を緩ましたのかもしれない。

牧は思った。

今日の試合が始まるあと10分か、そこらの^{のち}後に、三井寿は今を覚えているだろうか？　しかし記録には残る。

そして戦慄とともに、見ていたオレの記憶にも……。

三井の放ったそのシュートは、今までよりも高く、美しい弧を描いた。

そしてインターハイ会場の男子トイレの床は……

後に安西監督は語る。

「三井君はかつて混乱を……　ほっほっ。のちにとっておきの飛び道具を……このチームに与えてくれた……　ほっほっほ」

そして、天才桜木は言う。

「もしかして？　…これで終わりっすか？　この話」

……そうです。スイマセン。

北野さんがいつも言うてはった
「バス蹴っ飛ばす気か？」

……お蔵入り決定！

……しません。たぶん。もう二度と。

いろいろスミマセン。

トムソーヤといた夏【ジュブナイル】

トムソーヤにあこがれていた、君といたあの夏。

その、どこまでも高く、つき抜けていくようなスカイブルーの青い空。

ここにある風景を、あんな気持ちで見上げることは、もう二度とないことなんだと思い知ったとき。

気が付けば一人、同じようでもあまりに違う、晴れ上がった夏の空を見上げ。

しゃくり上げるように涙をぼろぼろこぼしてた。

あの夏、あの人は透き通るように少年だった。

そして、あのときの私といえば……

このありふれた田舎の小学校のプールサイドで、揺らめく波間の反射光に照らされて……あまりに少女過ぎた。

「マコトくん……私は、……私は」

……ハックルベリー・フィンにはなれなかったよ。

これは、小学校6年生の時の話です。
当時の私は、とある海に近い田舎町に暮らしていました。
自然に囲まれてていいね。と、人は言うかもしれませんが。
でも、周りにあるのは海と砂浜と田んぼと山ばかり。
交通の便が悪く、世間に隔絶されたようなその町には、人に伝えて印象付けらるようなものなんて、本当に何ひとつ存在してなかったのです。

そんな田舎町に、一人の男の子が転校してきました。
色白で綺麗な顔立ちをした男のコでした。

「なぐにあの子。なんだか、ひ弱そうね」

「転校生でしょ？」

「足細ーい」

「でも可愛い顔立ちしてない？」

「ほんとだ！ ジャニーズみたい」

「てか王子？」

「あは、言えてる」

若葉萌える五月の半ば、母親に連れられたその子の姿を登校途中に見かけ、私達女子グループはそんな噂話をしました。

実は私は、その子が転校してくることを知っていました。

いいえ、正確に言えば、知らされていました。
私の母から。

母は地元の療養所の看護士で、その療養所に通うため、私と同年の男の子が都会から引越してくることを私に告げました。

「いい？ 真琴。病気とはいえ大人の都合で子供がいきなりこんな田舎町に連れてこられて何もわからなくて不安なの。少々のは目はつぶって、親切にしてあげるのよ」

そのとき私は、お風呂上りで、バスタオルで髪の水気を取りながら、冷蔵庫をあけて牛乳を飲もうとしていたときで、

台所で洗い物をしていた母には生返事しか返しませんでした。

それにしても、今まで周りにいた、純朴で無骨なデリカシーのない田舎の男の子達を見慣れた私には、その子の姿はどこか不思議な、まるで未知の生き物を見ているような感じがしました。あまりにも現実離れた存在とでもいうのか……。

少年の名は、綾島マコトくん。余談ですが私の下の名前もまこと（真琴）という名でしたので、彼が転校して来た日から、彼が去った日まで、男子からも女子からも、そのことで時折からかわれました。

マコトくんは心臓に持病を抱えていました。

知人の紹介で、この田舎町に母親と二人で療養にやってきたそうです。

半年後には都会に戻るとも言っていました。

当時の私達には考えも及びませんでした。普通都会からやってくる子供は、田舎町を变に見下していてプライドが高く、なかなか

田舎のコミュニティーに馴染みにくいもののだそうです。

でも、彼に限ってはそんな部分は微塵もありませんでした。

色黒な男子達に混じって気さくに笑い話をしたり、いたずらに参加したりしていました。

ただし、病気のせいで激しい運動は出来ませんでした。

だから、体育や水泳の時間は教室で本を読んで過ごしていました。

ある日の水泳の時間、私は水着に着替えてプールに入る瞬間唐突に、いわゆるアレが始まって、先生にその旨を告げて教室まで生理用品を取りに戻りました。

教室では窓際の席でマコトくんが本を読んでいました。

プールから慌てて戻ってきた私を驚くような表情をして。

「どうしたの？」

って声をかけてきました。

私は本当のこととも言えず

「少し具合が悪くなって、先生が休んでいいよって……」

なんて感じで、お茶を濁しました。

「保健室連れてってあげようか？」

なんて聞かれました。

その表情は、心底親切で、マコトくんは何もわかっていないようで、少しホツとしました。

私は、服を持ってトイレに向かい、着替えた後また教室に戻りました。

薬を飲んで元気になったと言った私に

「こっちの席に座ったほうがいいよ、風が涼しくて気持ちいいから」とマコトくんは窓際の席まで誘ってくれました。

そして体育の授業が終わるまでの少しの間、二人でおしゃべりしました。

「何の本読んでるの？」

私は普段から何となく気になってたことを聞いてみました。

「ん？ トムソーヤの冒険」

「ああ、聞いたことあるねそれ」

いつもマコトくんは男の子達が外で遊んでる休憩時間、教室の窓際の席で一人ぼっちで本を読んでいました。

この田舎町を檻のように囲む山々。そこから打ち落とされるように吹きつける涼やかな風が、教室の白く薄いカーテンを揺らして、そのときのマコト君の横顔は、病的なまでに美しかった。

「それって、どんな話？」

「ちよっぴり元気で好奇心の強い普通の男の子の話だよ。昔のアメリカの田舎町、ミシシッピー川のほとりの小さな町で暮らす少年が冒険をしたり、周りの人達と騒動を起こしたりする話さ」

「ふうん。いつもそれ読んでるの？」

「そうだね、本は何冊か持ってきたけど、この町に来てからは不思議と、こればかり読んでる」

そう言って彼は軽く笑った。

マコトくんは、優しいコでした。みんなと気さくに話もするし、人を建てるのが上手いというか、当時は気付かなかったのですが、処世術に長けていました。

人を不快にさせるような行動や会話をすることはありませんでした。

けっしてでしゃばったりしませんし、引きこもったり人をきよぜつすることもありません。

とても、上手にこの田舎の子供達の作るコミュニティに溶け込

んでいました。

「ねえ、本を読むのって楽しい？」

私は自然と質問が浮かび上がってきて尋ねていました。

男の子相手に、構えたりしなかったのが、今思えば不思議です。

「俺、持病があるから皆と運動できないんだ。本当は皆と遊べたら楽しいんだけどね。だからかな、この本読むとこの町で皆と遊びまわってる気分になれるんだ。もちろんまことちゃんともね」

そこまで言わせて、私はバカだ。知っていたのに。と思いました。

「……そっか、ゴメン」

落ち込む私をよそに、マコトはその秀麗な顔立ちに優しい微笑を浮かべて言っています。

「いいんだ。本を読んでも振りをしてるけど、ここから皆が校庭で遊んだり、プールで泳いだりするのを眺めてるのは楽しいよ」

「へえ」

「まことちゃんって泳ぐの上手だよね」

そう言えば、そこからは校庭の向こうにプールも見えました。

「え？ そう？」

「いつも、みんなが運動してるの見てるからかな。綺麗なフォームで泳いでいるのは誰だろうってすぐ目で追っちゃうんだ」

「そ、そんなことないよ、それにプールはココから遠いじゃない。見間違いだよ」

私は顔を真っ赤にして否定しました。

「ううん。そんなことないよ。俺まことちゃんが泳いでるのすぐわかるもの。今日だってうちのクラスの輪の中にまことちゃんがいないのすぐわかったし。俺まことちゃんの泳ぎ方……好きだな。」

……好きだな。

男の子に、そんなこと面と向かって言われたのは、はじめてで。私は顔が真っ赤になりました。

もちろん変な意味じゃないことはわかっているのだけど。

「そ、そう。でも女子は、もう体力じゃ男子に適わないし、みんな休憩時間も男子みたいに外を走り回ったりするより木陰でおしゃべりしてる方がいいんだって。だから私今度の水泳大会も出るのやめようかと……」

私の町の小学校では、夏の間、県の大大会に出る代表を決めて練習をします。私も選ばれてはいたのですが……。

「そうなんだ、……残念だね」

そう呟いたマコトくんは心底ガツカリした面持ちでした。

小学校五、六年という時期は、女子にとって、男子より先に大人への階段を二歩も三歩も進んでいった時期かも知れません。そして男子達は、いまだ夢中になって夏の太陽の下を、犬のように駆け巡ってる。

男子と女子の間には、その頃からひょっこりと大きな透き間が出るものなのかもしれません。

そして、マコトくんはその空白地帯にあらわれた、異質な存在だったのかもしれませんが。男の子だけど皆とは遊べず。かといって女の子の中に取り込むには異性ということを意識し始めた田舎娘の私達には難しかったのです。

男子からも女子からもそんな透き間を、暗示させる存在。それでもマコトくんはうまく立ち回っていました。

相変わらず男子のバカ騒ぎに付き合い、女子に気配りを見せながら静かに涼やかに窓際で本のページを繰る。ときおりやさしい言葉を一言二言かけて、決して無視してないことをそつと伝えながら。

そんな風にして日々が過ぎ、夏休みが始まりました。

私は結局、辞退出来ずに、水泳大会の練習のため、毎日学校のプールに通っていました。県の大会は盆を過ぎた夏休みの終わりの方です。

プールで泳ぎながら、ときどき校舎の教室の窓に目をやり、いるはずもないのにマコト君が微笑んでいるような気もしてました。

そのほかの時間は私は女友達何人かと毎日溪流の木陰で涼んだり、農作業をしているおじいさんの所へ言ってみたり、友達の家でクーラの聞いた部屋でだらけて過ごして見たり、そんな風に友達とおしゃべりをして過ごしました。

誰それが東京のお土産に何々をもらったとか。

幾つかの駅を隔てた街にあるおしゃれな食べ物屋さんのこととか。

列車を乗り継いだ都会にあるヘアースalonで、髪の毛を切ってもらった子の話だとか。

テレビドラマの話。芸能人のゴシップ。

恋の話もチラホラ、もちろんほとんどは誰かのお姉さんや、知り合いの話で、ときには片思いの男の子の話をする子もいるにはいるけど……

でも、話のスケールは違っても話の内容に大差はない気がするんですよね。

いくつだろうと、そういう話が好きなんですよ。女の子は。

そして、ふと夕暮れの田んぼのあぜ道を一人歩く帰り道。

森深くのヒグラシの涼やかな鳴き声が聴こえてきて……。
胸を切なくもしました。

そんなとき決まって私は、そういえばマコトくんは、休みの間どう過ごしてるんだろう。なんてことを、考えたりしてたのです。

そんな風に夏休みの日々は流れ、そして、お祭りの日がやってきました。

小さな田舎町ではそんな些細なイベントも町民総出の一大行事です。

私は、同い年で別のクラスの仲の良い女のコ達と、浴衣を着込んで祭り見物に出かけました。

路地から表通りへ出ると、街角の家々の軒先に提灯が連なるようにぶらさがっています。

昼間、あれほどけたたましかったセミの鳴き声も、陽が地平の山並みに没すると、さすがになりを潜め、夕闇は集落を包みこみ、神社に続く参道には打ち水がかけられて、残暑に蒸された泥臭い熱気が、行き交う人々の間を漂い、そこをハッピー姿の男の人達が水しぶきを上げて、いなせに駆け回ります。

道すがら、遠くから微かに聞こえていた笛の音や、太鼓のお囃子

は、神社に近づくにつれ、だんだんとはつきりとした祭囃子の合奏となつて聴こえだし、その間も私達を追い抜くように神輿や山車が続々と境内へと運びこまれ、そこかしこから町の人々が集まり、喧騒と笑い声がそこで響いています。

まさに今日はこの場所が、街の中心です。

その参道には露店が所狭しと立ち並び、発電機の音と、客引きの掛け声、派手派手しい看板やテントがランプに照らされて、宵闇に沈んだ鎮守の森を活気付いた色合いで妖しく輝かせます。

私が近所の女の子グループとはしゃぎまわりながら、そんな不思議な情緒をかもし出す夜店を次々見物していると、その道の途中でマコトくんと出会いました。

マコトくんは母親と二人で祭り見物をしていたらしく、私の姿を見つけると笑顔で手を振ってきます。

私は、少し気恥ずかしかったのですが、ご近所友達を待たせてあいさつをしに行きました。

「こんばんは」

「あら、こんばんは、マコトのお友達？」

「はい」

「まことちゃんだよ」

「へえ、この子が。なかなかかわいい子じゃない」

「何いってんだよ！ ごめんネまことちゃん」

「あら、いいじゃない。かわいい子にかわいいって言って何が悪いの？」

「恥ずかしいじゃないか。まことちゃん困ってるよ」

「そう？ まことちゃんおばさん恥ずかしいこと言ってる？」

「いえ、大丈夫です」

「ほらごらんなさい。女同士にしかワカラナイのよ。ねえまことちゃん」

「は、はあ」

「まことちゃんお友達と来てるの？」

「ええ、まあ」

「そっか…… 大事な用でもあるの」と、マコトくんのお母さんは言いました「例えば、好きな男の子と待ち合わせしてるとか？」

「…… そんな人、いません」

「じゃあよかった。ねえ、お願いまことちゃん、私これから用事があるのよ、でもこの町の折角のお祭りだし、祭りが終わるまでこの子とデートしてやってくれないかな」

「母さん！」

さすがにマコトくんも赤くなつて母親に抗議しました。

「いいじゃないの、この町の思い出に、ねえまことちゃん」

言葉と表情は優しいのですが、瞳の奥に有無を言わさぬ威圧感があつたので私は思わず頷くことしか出来ませんでした。

それで、私とマコトくんはそれぞれ母親と友達から別れて、二人で祭りを見物することになりました。

祭りに参加していた同じクラスの男子達も、人垣から私とマコトくんが二人でいるのを見つけるとこっちを指差してちらちら見たり、囁し立てられたりもしました。

でも、マコトくんはそんな揶揄には少しも動じなくて、時折彼らに手を振り返したりしました。

この辺は、さすがに都会っ子だなという感じでした。

私も、あんまりびくびくしている方が逆にかっこ悪く感じれたので、見下されないように堂々と振舞うようにしました。

「あ！ まことちゃん、獅子舞が始まるよ」

マコトくと私は、祭りでにぎわう人ゴミを掻き分けて、境内に向かいました。

昭和の古い面影を色濃く残す社の境内では、神殿の奥の扉が開かれ木彫りの御神体を拝ませます。

そして、奉納の子供獅子舞が始まりました。

赤と金に塗られた獅子頭が三匹、宵闇の中で妖しく浮かび上がり、生きてるかのように歯をカチカチと鳴らせながら、身をくねらせて舞い踊ります。その周りをハッピー姿の男の子たちが、時に獅子を恐れるように、時に獅子をからかうように、かがり火の炊かれた境内を右に左に跳ね踊ります。

三匹の獅子のうち二匹が地に伏せ、舞の最後は一匹の獅子が月に向かって咆哮を上げました。

見物客から拍手が起こります。

それは、とても見事な舞踊でした。

同級生の男の子たちの獅子舞演技が終わり、私達は夜店見物に出かけることにしました。

参道には所せましと屋台が立ち並んでいます。それはもちろん、古式ゆかしい昭和なテキ屋の風情で、粉モノを焼いてるコワモテの

おじさんが、順番待ちの出来ない子供相手に、容赦なくダメ出しのダミ声をあげ、おばちゃんがかくわえタバコで輪投げの店番をし、若いお兄さんが額に汗を垂らせながら、焼きソバを、両手に持った二つのコテで、中空まで麺を振り躍らせ、ジュツという音とともに焦げたソースの香りを辺りに漂わせて焼いたりしています。他にも金魚すくい、射的、焼きトウモロコシ、たい焼き、ヨーヨー釣り、リング飴、かき氷、ラムネやコーラ……。そして、祭り見物の大人達の隙間を浴衣姿の幼子達がはしゃぎながら追いかけてっこしています。

「まことちゃん。ヨーヨー釣りしようか？」

とマコトくんが言いました。

「いいよ。こう見えても私、得意なんだから」

「じゃ、競争しようか？」

「いいよ、何か掛ける？」

「じゃあ、負けた方があそこに売ってあるお面の、どれか変な奴を祭りの間かぶり続けるってどう？」

「よし！ 決まり」

どうやらマコトくんは、ヨーヨー釣りをするのは、はじめてのようでした。

持病のため普段は、夏の今でも、長袖のダブついたシャツを着込んでいるのですが、ヨーヨーを吊り上げたその瞬間。その袖先から、真っ白な手の甲の4本の筋と青い静脈をチラリと覗かせました。

その、ぎこちなくも優雅な手つきの細い指先が、赤いのと水色の水ヨーヨーと、2つも吊り上げて、初めてにしてはなかなか健闘しました。

とはいえ、幼い頃から毎年鍛え上げた私の腕には敵いません。

私は透明なのから桃色オレンジ……合計七個吊り上げたところで、

わざと紐を水にたらし、千切れさせました。

「まことちゃん。強いなあ」

「エヘヘ…… まあ、ざつとこんなもんよ」

気が付けば、いつのまにかまた私は、自然にマコトちゃんと話をしています。

その後私達は、お面屋さんの屋台の前まで行きました。

「どれにしようかな？」

私は罰ゲームのお面を選びます。

「あまり変なのはやだよ！」

マコトくんは懇願します。

「でも、それじゃあ、面白くないじゃん」

とはいえ、どれでも同じに見えました。

「アレにしよう。おじさんアレ頂戴！」

そのあとマコトくんは、ずっとキティーちゃんのお面を頭の上に被って祭り見物をし、ときどき小さな子供に指を指されて笑われたりしました。

私達はそれから屋台を見周り、射的をしたり、綿菓子を買ったり、型抜きで遊んだり、焼きソバを食べたりしました。

そして神輿の奉納も終わって、今まで祭りの主役だった人達が仕事を終え、どつと参道の屋台に集まってきたところで、私達は一休みしに境内に入り縁側の廊下に座りました。

私達はそこから、露店に群がり祭りを楽しむ人々を、遠巻きに眺めました。

「ふっっ 面白かったね」

そう言ってマコトくんは買ってきた二本のラムネを私に一つ手渡すと、自分の分は一気に飲み干しました。

首を上げたマコトくんの、のど元は少し汗ばんでいて、ラムネがのどを通り過ぎる度のど仏がゴクゴクと収縮し、遠くの光に照らされて産毛が白く輝いていました。

そして飲み干した後、少しむせ返りながら、私の方を振り向くと、真っ直ぐな眼差しで、さっきまでの屋台の感動を、矢継ぎ早に話します。

「うん。でも……体、大丈夫？」

私は、マコトくんの体のことが心配になり尋ねました。

一瞬、刻が止まり、マコトくんの表情が一変しました。

「自分のことはわかってるよ。そんな目で見ないでよ」

切れ長の目を更に吊り上げて、マコトくんは叫びました。

私は驚き、そして気付きました。いつの間にか私はマコトくんのことを上からの目線で見ていました。

私は無言でうつむきました。

そんな私を見て、マコトくんは態度を変えて謝ります。

「ごめん、まことちゃん。大きな声を上げるつもりじゃなかったんだ。ただ……」

私は、小さくなって消え入りそうなマコトくんの言葉を遮って言いました。

「ごめん！」

二人の間に沈黙が訪れました。

祭りも終盤に差し掛かり、ラムネを飲みながら境内で休んでいると、近くにいた人たちからざわめきがして

「花火が始まるぞ！」

と声が聞こえてきました。

近くの河原から、花火が打ち上げられるのです。

人々はそろそろと移動し始めましたが、何人かは残っています。この境内からも、花火は良く見えるのです。

「どうしよっか？」

私は、マコトくんに尋ねました。

このままココに留まるのか、それとも、河原近くまで行って花火見物するのか？ と言う意味で聞いたのですが、マコトくんは、それとはまったく別の答を出しました。

「学校のプールに行こうよ！」

確かに、そこからも花火は見えないことはありませんが、ここより遠く離れます。それに、そんなところから花火を見る人なんて多分、誰もいません。

でも、マコトくんは私の返事も聞かず、浴衣姿で歩きにくい私の手を取って、ぐいぐい引っ張って行きます。

男の子に手を握られて、引っ張っていかれるのは、はじめての体験でした。

夏だというのに、その手の平はひんやりと少し冷たく、そして、しっとりとしていて……

歩行のリズムの加減で、時折私の肌に触れる彼のシャツの袖先が、少しくすぐったくもありました。

そのまま私達は小学校のプールに忍び込みました。

夜のプールサイドは薄暗く、時折上がる花火に照らされます。

水面は目が慣れるまで良く見えなくて、月明かりに反射した光が波間を揺れていました。

マコトくと私は、金網に背中をもたれかけて、首を上げ、そんな風に二人で、次々と打ち上げられていく花火を眺めました。

夜空の暗幕を、轟音で打ち鳴らしながら弾け、輝き落ちてゆく火花はとても美しく、私はマコトくと二人で見た、この光景を一生忘れないだろうと頭の隅で感じていました。

「トムソーヤにはハックルベリーって親友がいるんだ」唐突にマコトくんが口火を切りました。そして話続けます「まことちゃんは僕のハックルベリーだ」

「それ、褒め言葉じゃないよ？」

私は笑って答えます。

「……なんで？ ハックルベリーはすごいんだよ。本当の自由を手にしてるんだ。本当の自由。誰にも頼れない不安の中で、誰にも頼らない強さを持っているんだ。だからハックルベリーは僕の最高の勲章さ！ まことちゃんはハックルベリーだよ。おかしい？」

そのとき私が、きちんと答えていれば、マコトくんはあんなことはしなかったのかもしれませんが。

でも、私の口から出た言葉は

「きれい……」

そのとき、唐突に夜空で花火の連弾が始まりつて、私は思わずマコトくんの話から逸れ、そんな言葉を呟きました。

それは、今までのどの花火よりも頭上高くのぼり、空を覆い尽くすようなシャワーとなって弾け流れ、迫ってくるかのように幾筋も幾筋も降り注いできました。

「……ありがとう」

マコトくんは確かにそう言ったような気がします。
今にして思えばですが。

そのときの私は眼前に広がる、夜空の暗幕に火花が作り上げた光景に夢中で、聞き流していました。

花火が終わってプールサイドに静寂が訪れると、突然マコトくんが言い放ちます。

「オレ、本当は泳げるんだ。まことちゃん見ててよ！」

「え？　ちょ……」

そう言うマコトくんはスルスルと服を脱ぎ捨て、パンツ一枚でプールに飛び込みます。

「えー、やめなよ」

あまり叫ぶと、大人に見つかって叱られると思い、私は大声にならないよう声を低くして必死に叫びました。

でもマコトくんは無邪気そうに「マコトちゃん見ててよ！」と叫ぶと、クロールでプールを縦に横切り泳ぎはじめます。

それは、月明かりの下、とても静かに。とても美しい波をたてながら。

真っ黒な水面から覗く、水に濡れて滑ったマコトくんの、白い裸身は本当にきれいでした。

プールサイドの冷たいコンクリートの上に、マコトくんの衣服とキティーちゃんのお面が脱ぎ散らかされて、淋しげに取り残されていました。

そして、マコト君がそんな風に泳いでいる間、私の胸は不安で突き動かされ続けたのです。

結局マコトくんは往復50メートルを泳ぎきり、飛び込み台の下で、水の中から立ち上がると「どうだったまことちゃん？」と聞いてきました。

私は「大丈夫？」と言いかけた言葉をのどに押し込み。

「上手だったよ！」と答えました。

それが聞こえたのかマコトくんは満足げに笑みを返し、そのままこつちへ戻ってこようとした刹那後ろ向きに倒れこみながら、暗い水面の中にその姿を消していったのです

それから後のことは、あまりはつきり覚えていません。

私は浴衣姿のままプールに飛び込みマコトくんを地上へ引き上げました。

頬を二三度はたいて、意識が戻ったのを確認するとマコトくんに服を羽織らせて、ずぶ濡れの浴衣のまま、マコトくんを背負って診療所へ向かって駆けだしました。

私は走りながら泣いていました。マコトくんの体はあまりに軽く、このまま死んでしまうのではという不安で泣いていました。

「大丈夫。ごめんねマコトちゃん。少し無理しちゃった」

マコトくんがささやく声が、生暖かい息になって耳に当たりました。

それでも、さっき水面から引き上げたときの、月明かりの下からでもはつきりわかる、血の通わなくなった紫の震える唇の映像が脳裏にこびりついていて、私はさらに泣きじゃくりながら先を急ぎました。

診療所にたどり着くと、私は乱れた呼吸のまま、必死に診療所のドアを叩き続けました。

そのうち奥の明かりがついて、知り合いの看護婦さんが、玄関まで出てきてくれました。

マコトくんは診察室に運びこまれ、私はずぶ濡れの青い浴衣から水滴を滴らせながら、薄暗い待合室に立ち尽くしました。

気が付けば時間が経っていて、待合室には明かりが灯っていて、私は白衣に着替えていたお母さんに、頭を小突かれていました。

「まこと、しっかりしんさい！」

私は我に帰り、さっきから隣に寄り添ってくれていたマコトくんのお母さんに気付き、何度も何度も謝りました。

「ゴメンナサイ！ ゴメンナサイ！ ゴメンナサイ！」

「いいのよ。こんなことは慣れっこだから大丈夫。それよりまことちゃんこそずぶ濡れじゃない、早く家に帰ってお風呂に入らないと、まことちゃんこそ心配だわ」

マコト君のお母さんは私の頬に手の平を差し出して支えてくれ、微笑んでくれました。

それは、今夜の月明かりのように優しい優しい笑顔でした。でも、私の頬に触れた、その細くてすべらかな指先からは、微かな震えが伝わりました。

結局マコトくんは、命に別状はなかったのですが、そのまま風邪をこじらせて三日ほど入院しました。私は毎日お見舞いに行きました。

家に戻ってから、マコトくんの家まで何度か遊びに行き、色々な話をしました。

そして、夏休みも終わろうかと言う日曜日。県の小学生部門の水泳大会が開かれました。マコトくんは朝から、お母さんと一緒に応援にきて暮れました。私は見事決勝レースまで勝ち残り、結果県2位になりました。

夏休みが終わり、学校が始まってからも私達は積極的に仲良くなっていきました。

友達に離し立てられたりもしましたが、それは恋などと言う感情ではないと、私は自覚していました。

なにしろマコトくんには、そんな気はないのです。

そして、

だからこそ……、

わたしはハックルベリーフィンになりたいと願ったのです。

秋が深まり、運動会や、遠足や、楽しい行事がありました。

もちろんマコトくんは直接は参加は出来ませんでした。でも、観客席の中や先生の車の助手席から、私達に向かって楽しそうに声をかけてくれました。

11月の終わり、もう山々は綿帽子をかぶり、里にも雪が降ってこようかという冬の始まり。マコトくんは予定よりはやくこの町を離れることになりました。

見送った駅のホーム。私は、泣かないことに決めていました。それで、マコトくんが窓から半身を乗り出して、手を振りながら去っていく列車に、こっちも笑顔で手を振り返し続けました。

ハックルベリーなら、きっとそうするだろうから。

その後、マコトくんとは何度か手紙のやり取りをしました。

クリスマスが来て、

年が明け、

雪がしんと降り積もり、

春の予感が、里に降り

春風が吹き、

サクラ舞い、

若葉が萌えて、

長雨の後、

また、夏が……

夏祭りの準備の喧騒が、再びこの町をつつむ頃。

その連絡は、静かに私の元にやってきました。

私は母とともに喪服に身を包んで、マコトくんの暮らした都会の街に列車と飛行機を乗り継いで、向かいました。

葬祭場で、マコトくんのお母さんは、すでに泣き腫らし化粧のはげ落ちた、腫れぼったい顔をして、私の訪れを喜んで迎えてくれました。

「ごめんなさいね。秘密にしてて」

すでにマコトくんは、直る見込みのない病に冒されていて、私の町へは、治療のためではなく、田舎で生活してみたい願いをかなえるため、ただそのことのためだけに、やってきていたのです。

「本人には病状のことは伝えてなかったけど、なんだか薄々気付いていたみたいなの……」合併症になり、成功する確率の少ない手術に向かう前「……まことちゃんのことをしきりに気にしてたわ」

私は、泣きませんでした。

マコトくんの葬儀が終わり、その夜泊まったホテルでも、帰りの飛行機の中でも、特急列車に乗り換えても……

次の日のお昼過ぎ、私は、ふるさとの町へ帰ってきました。

母は仕事に出掛け、私は一人、町を散歩しました。いつもの私じやなく、マコトくんの視点に立って町を眺めることにしました。

彼はこの町に何を求めていたんだろう。

彼はこの町で何を手にしたんだろう。

最後に私は小学校へ行き、そのプールサイドに立ちました。
お盆前の午後、学校の敷地内に人影はありませんでした。

激しく照りつける陽光と、熱い足元のコンクリート。

マリンブルーの水面は、おだやかに波を立て、水底に引かれた白い線を屈折させ、揺らしていました。

私は一年前のこの夏のことを思い返します。

そして、突然涙があふれました。

それは止めどもなく流れ続ける涙の洪水と嗚咽の合唱でした。

私は、押さえつけていた感情をコントロールできなくなり、ただただプールサイドに立ち尽くし、ずっとその場所で空を見上げたまま、目頭を拭うこともなく、両手をだらりと垂れさせて、バカみたいに泣きじゃくり続けたのです。

ハックルベリーになりたいと、心から願ったあの夏の、どこまでも高く、つき抜けていくようなスカイブルーの青い空。

ここにある風景を、あんな気持ちで見上げることは……、

もう二度と、手に入られないことなんだと思い知ったとき。気が付けば私は一人、同じようでもあまりに違う、晴れ上がった夏の空を見上げながら、しゃくり上げるように涙をぼろぼろこぼしてた。

あの夏、あの人は透き通るように少年でした。

そして今の私は、このありふれた田舎の小学校のプールサイドで、揺らめく波間の反射光に照らされている。

「マコトくん……私は、……私は」

……ハックルベリーには、なれないみたいだ。

夜墮草 【ホラー】

注）この作品には違法行為を教唆もしくは促し、扇動する意図は全くありません。

自己責任と社会通念に対する判断力を持たない方はご遠慮ください。

中岡はワンルームマンションに一人暮らしをしていた。

そこはバイト先からも、大学からも近く、俺たちの溜まり場のようになっていた。

で、仲間内で集まるといつもくだらない話をしているのだが、その日は誰が言い出したのか、怖い話大会が始まった。

…夜の学校の水のみ場で水を飲んでいると、後ろから赤いマントを着た…

…終電が無くなった駅のホームに、一人男が立っていて、近づくとケータイを眺めながらブツブツ。そこには写メが映っていて、なんとその男の…

…城の、お堀のところにある公衆電話。夜中の0時ちょうどに行くと、見えるらしいよ…

…江戸時代に、ある武家の奥方が浮気をして、罰としてその相手と共に拷問を受け、町民の前で縛られて生きたまま埋められ、その上に柳の木が植えられたらしい。その場所がちょうど大学の…

などなど、地元で有名な話をみんなが、やいのやいのとやり取りをする。

ふと中岡がクローゼットを開け、奥からタバコを取り出した。封の切られた、赤ラークだ。

「あれ中岡タバコ吸ってたっけ？」

と誰かが言う。

「ああ、普段は別に吸わねーんだけど、怪談話のときは吸いたくなるんだ」

そう言って火をつける。

その違和感に気付いたオレは、何気なく尋ねてしまった。

「そのタバコなんか変だな？」

「あ、気付いた？ 中身は田舎の友達にもらった、紙巻タバコだ。癖があるんだけど、気に入ってんだ」

「へー、一本もらっていい？」

「どうぞ、もう数ないけど」

オレが一本もらって火をつけると、皆がオレもオレもと手を出してくる。

吸ってみると、確かに癖がある。

でも、吐き出すほどでもない。

「ブレンドしてあるから、素人でも大丈夫さ」
中岡はそう言っと、話を始めた。

「オレの高校時代の友達に、島根の奥地の山間部に住んでる奴がいたんだけど……」

その集落は平家の落人伝説で知られている。

五月の節句を祝ってあげた鯉のぼりが、運悪く源頼朝の家臣に見られてしまい、一番鶏の鳴き声とともに攻め込まれた。

「今でも、その村では鯉のぼりは上げないし、鳴き声をあげる鶏を飼うことはないんだ」

昔は炭焼きとか、猟をして暮らしてたらしい。

ま、小さな田んぼや畑もあるし、牛を飼ってる人も居る。

山の奥では、松茸や山菜が取れるので、地元の人間以外が密猟に来ることもある。

で、村の自治会の年寄り連中が、猟銃をもって見回りをしたりするんだ。

とうぜん俺の友達も子供の頃から、その奥地には近づいちゃいけないって言われていた。

村人は代々子供の頃から、ある言い伝えを教わっているんだ。

「……言い伝え？」

「そう。言い伝え、というか物語かな」

それは、こんな話だ。

その奥地には大きな岩がごろごろしていて、多くの洞窟があった。その一つには、岩肌に沿って木像のお堂も建てられていて、国の

重要文化財に指定されている。

そして、その岩だらけの山奥には、ぽっかりと校庭ぐらいの広さの原っぱが開けているらしい。

「落ち武者が馬を隠して育てたらしいんだけど、そこには今でこそふさがれているけど大きな大きな洞窟があつて、平家の落ち武者が村にやってきたとき、そこに村人が匿つたらしい。その辺りには、今では地元の人間に忌み嫌われている、草が自生しているんだ」

さつきも言つたように落ち武者たちは全員、源頼朝の家臣に殺されてしまう。

一番鶏が鳴き始め、朝日が集落を照らす頃、その草むらは血まみれの平家の落人の死体で埋め尽くされた。

洞窟の内部には、その凄惨な殺戮の爪痕として助けを求め逃げまどつた彼らの、血塗られた手形が幾つも残っていた。

季節は変わり、時が経ち、いつからかその草むらに、五本指の手のひらのような葉っぱで鋸の刃の様に細かいギザギザを持つ草が生え始めた。

その葉は良く見ると血しぶきを浴びたような茶色の模様が入っているらしい。

集落の人々は、落ち武者達の無念が生えさせた草だと信じている。で、地元の人間は彼らの無念を供養するため、その草に特別な名をつけて呼んだ。

「……夜墮草じやふそうとね」

だからその場所に近づいたり、勝手に抜くと、平家の落人の祟り

があるという伝説が残ったんだ。

「知ってるよそれ、逆から読むんだろ？」

誰かが高い声を張って言った。

「なにそれ？」

とオレは聞く。

「よだそう」「逆さから読むと？」

「う・そ・だ・よ……嘘だよか！ ははははは」

「笑えるだろ、ははははは」

皆で笑った。

オレも笑った。

中岡も笑っていた。

何だこれ妙に面白い。

はははははは

知ってる話なのに。

はははははは

皆バカみたいに笑ってる。

ははははは

気持ちいい。

ははは

でも、気持ち悪い。

はは

目眩かな？ 部屋がぐるんぐるん回りだした。

はははははは
笑い声の渦の中
ははははは

オレはそのまま意識が飛んだらしい。

*

「大。」は消して！ネット有害情報削除に指針
2006年10月26日（産経新聞東京朝刊）

〓〓〓〓〓〓

わいせつ情報や麻薬などインターネット上に氾濫する違法・有害情
報の削除方法を検討していた総務省は25日、ウェブサイトの管理
者が削除しなければならぬ情報の具体例を列挙し、どの法律に抵
触するかなどを明示したガイドラインを作成した。

接続事業者などはネット上の有害・違法情報を削除できるが、情
報は表現の自由や通信の秘密の保持などの法律に守られているため、
事業者が判断に迷い、必ずしも削除されていないものも多い。

ガイドラインに示された違法情報は、（１）わいせつ関連（２）
薬物関連（３）振り込め詐欺関連 - が中心。

例えば、「規制薬物の乱用を、公然、あおり、唆す行為の禁止」
（麻薬特例法第9条）は、抵触すれば3年以下の懲役または50万

円以下の罰金に処することを明示。

「大〇、エク〇タシー」などの規制薬物名や購入方法の記載は違反となるなど、具体的な内容を盛り込み、過去の判例も記されている。

小さなサイトや接続業者は、内部に専門家がないため、違法かどうか判断できない場合が多かったが、総務省では「具体的事例を示すことで、違法・有害情報を削除しやすくなる」と効果を期待している。

ガイドラインは電気通信事業者協会、テレコムサービス協会、日本インターネットプロバイダー協会、日本ケーブルテレビ連盟と総務省が共同で作成した。

【2006/10/26 東京朝刊から（一部伏字あり）】

*

気が付くと朝だった。

中岡だけが目を覚ましていて、他の皆はばらばらに床に寝ていた。

「何か気持ち悪いよ」

そう言う中岡は、実は、俺もだ。と返した。

みんな次々と目を覚まし、頭が痛いだの、喉が枯れてるだの、と訴える。

そしてバラバラに別れ、それぞれの家へと帰っていった。

その日の夜バイト先で、中岡と顔を合わせた。
昨日の騒ぎがうるさかったと、隣人に鬼のような勢いで怒られたらしい。

「俺もう、あんな怖い思い二度としたくないよ」

夜が堕ちれば、麻（朝）になる。

と言うわけで怖い話でした。

良い子のみなさん、マネしないで下さいネ！

悲しみに言葉を【文学】

今、この街で、僕は、孤独を、生きている。

目覚ましが鳴り、ベルを止めて起き出すと、ぼんやりした頭のまま、洗面台で歯を磨く。

顔を洗って、台所に行き、食パンをつまむと、口にくわえたまま冷蔵庫のとびらを開き、１リットルの牛乳パックを取り出す。横着に、立ったまま朝食を取りながらカーテンを開け放つと、早朝の薄明るい空は晴れ上がっていた。窓を開けて、朝の空気を取り込む。しかし春先といっても、まだ薄ら寒い。おだやかなれど冷たい風がほおを撫でる。

僕は、朝のかたづけを終えると、学生服に着替えて家を出た。母の部屋は静まったままだ。昨日の帰りも遅かった。まだ、眠っているのだろう。

通学路、影のようにつつむき加減で歩く僕に、誰も気付こうとしない。

はしゃぎながら行きかう小学生たち、登校途中に友達と出会い、世間話をはじめると同級生達。社交的なあいさつを交し合う近所の人たち。中学の灰色の正門の前に立つジャージ姿の体育教師。

僕は下足箱から、薄汚れた上履きを取り出し、リノリウムの床に落とした。その音は僕の中でゴングのように響き、これからの僕の、圧倒的な他人の中での一日のはじまりを告げる。

教室に飛び交うおしゃべりや、文科省の指針に沿って、はみださない教師の論説を耳に通じ抜けさせながら、これから巻き起こる暴力、いや、すでに始まっている。無邪気な圧力のことを考えながら、重たく、鈍い時間を、窓際のあの席で、過ごすことになる。

正直…… 苦しい。

そして帰り道。高架の中を歩いていると、ちょうど真上を列車が通る。つんざくようなその響きは、殴られたわき腹の痛みを助長する。

制服には乱れはない。あいつらも手馴れたもので、熟練の調理師のように僕の身の必要な部分だけをそぎ落とし、水槽に帰し、僕を泳がせる。

プライドも心も、あいつらは自分にしか興味がない。ただの八つ当たりだ。

でも、それでもまだ救われる。本当に怖いのは、弱っている人の心にストローを突き刺し、チューチュー吸い上げていくことを生業にしている連中だ。

「腐り掛けが一番、旨いのだ」と……

昨日、父から手紙が届いた。日付はずいぶん前だ。検閲済みのハシコが押してある。

「今日の夕方。太陽柱の夕陽を見た。今年の網走の冬は、過ごし易い。夕陽を見ながら思う…… 一番悲しいのは私じゃない、と。」

僕は、暗く静まった家の鍵を開けて、ドアノブをまわした。母親はすでに仕事に出かけていて靴はない。僕はその足で、二階にあがってベランダにのぼり、今朝干した洗濯物を取り込む。ベランダの棧からは隣町の団地群の隙間から、光が弱った薄い夕陽が雲間に隠れていくのが見えた。

僕は乾いたバスタオルを折りたたみながら、ふいに泣きたくなる衝動を押さえた。

僕だって考える。

何も言わないし、誰にも助けを求めない。

が、考える。

僕は、この街で生きている。きっと孤独だ。

でも苦しいが、悲しくはない。

多分…… きっと。

Slow fish , waltz【文学】

水族館の青い空間がただただ好きだった。
その場所に来ると、こんな体験を空想する。

たとえば、青深い水槽の底を手をつないで歩く。
二人の周囲を黄光色の魚達が彼らの聖域への侵入者を観察するよう
に飛び交う。

彼女の差し出した手のひらの餌に、魚達ははじめ警戒し、いつし
か二人をまるごと包むように群がった。

歩き疲れば、沈んだドラム缶をベンチ代わりにして腰を下ろし
た。

上空に蒔いた餌を奪いあうように鮮原色の魚たちがくるくる舞う。
辺りの岩に根づくイソギンチャクたちも潮流にゆらゆら会話して
いた。

時間はゆっくりと流れる。

水の中での難点は、タバコを吸えないことと声が出せないことだ
った。

握りあつた手の平の、微妙な力の入れ加減だけが行き来する気持ち。

やさしい静寂と水上からのやわらかな陽差しがドラム缶に座る二人に降り注ぐ。

僕達は浄化されていく。

練習用おっぱい成り上がり編【コメディ】

おっぱい、それは…

哺乳類の胸部や腹部に付随している、皮膚や脂肪等が隆起した乳腺の開口部と、その周辺。

雌だと成熟や妊娠につれて発達し、動物の種類によっては数対存在する。

乳もしくは、乳房。

しかし、そんな言葉では納得できない、男の魂を惹きつける不思議な魅力がその物体には秘められている。

中学生男子ならば、口には出さなくとも心の中で毎日50回は叫んでいるこの単語…

前略おふくろ様、ついに… ついに、この瞬間がやってまいりました。

オレはとうとうその、柔らかな感触に手を伸ばす日を迎えてしまったのです。

思えば長い苦闘の日々でした。

東で、時速40キロで走る車の窓から手を出した感触がその柔らかさだと聞くと、お年玉の半分をタクシー代につぎ込んで、夕暮れ時の湾岸道路を走り。

西で、学年に一人はいる、いじめられっこのドンくさいデブ男を

みつければ、何かと救いの手を差しのべて仲良くなり、友達同士のジョーク混じりのあいさつで毎回そのたるんだ脂肪が包む胸元をもんでみたり。

でも、そんな日々とも、もうおさらばだああああ！

ついに…… オレはついに、人生の新たなる一步を、今まさに踏み出す。

成り上がるぜ！

*

両親がいない二人っきりのリビングで、彼女は無防備に肌を露出したキャミソールを着て、ソファーに腰掛け、お笑い芸人児玉義男のDVDを見て笑っている。

いや、児島ヨダヲだったかな？ ……でも、そんなのかんけえーねええええ！

オレはついに作戦を実行する瞬間を迎えたことを実感し、軽く武者震いをする。

しかし、焦ってはいかん。

フン、フフン♪ さりげなく鼻歌を歌いながら、リビングを歩き、少女が座っているソファーの背後に回る。

曲はもちろん、おなら頭文字。いや、ちがう。おしり貸した虫だった。

いや、動揺しているのか？

違う、オレはいたって冷静だ。オレはいつもと変わらない。

掛け算だって5の段までは息継ぎナシで言える。

と、そのとき彼女が振り返って俺のほうを向き言った。

「お兄ちゃん！ さっきから何後ろでブツブツ言ってるの」

「え、え」と……」

ヤバイ、対象がこっちに疑惑の視線を向けてこっちを見えています。
オレは心の中の無線で本部と連絡を取る。

応答はゴーだった『ただちに作戦を遂行せよ！』（その間約0・2秒）

おれは実の妹（中二） に向けて言った。

「お前、何か少し太ったんじゃないか？」

オレは落ち着き払った素振りで尋ねる。

「え、そうかな？ 体重変わんないけど」

「いやいや、体重は変わらなくても筋肉が落ちて脂肪だけになってるんじゃないか？ 毎日テレビ見て寝転んで過ごしてるからだよ」

「そうかなあ？」

「ほら、俺が調べてやるよ」

「え？ 調べるって何？」

「いいから、じっとしてろよ」

強引に言い放つとオレはソファアの背後から妹を抱きしめるように、背後から腕を伸ばし、その柔らかな脂肪の塊を、てのひらですっと包み込む。

おおー！ おおおおおおおおおお！！！！

イ、イイ。……*（嬉、ハ、嬉）。……* ホワワワワ
ーン

天上から神々しい光が差し込み、頭の中で天使がラッパを吹き鳴らしながら飛び回る。

その至上の温もりとやわらかさ。

オレはまた一つ階段を上った。

【二の腕】それは人間の体の中で唯一おっぱいと同等の質感を持つ部位。

「どう？ お兄ちゃん」

妹が、オレに二の腕をつままれながら、尋ねてくる。

「うーん。やっぱり筋肉が落ちてるな」

「ふーん、あのさ…」

「何？」

「ひとつ言いたいことが、あるんだけど」

オレはその柔らかな感触だけに集中しながら妹に適当な相槌を打ち返す。それにしても、何て気持ちいいんだろう。まるで山深い秘境の温泉に浸かっているみたいだ。

「あのさ、お兄ちゃん…」

「なんだよお！」

おれは集中を邪魔されたくなくて、思わず軽くキレ気味に言った。

「あのさ… 心の中で思っていること全部、つい口に出してしまう癖やめたほうがいいと思うよ…」 かなりキモいんだけど」

気が付けば、妹は振り返り、今まで見せたこともないような怖い顔をしてオレをにらみ付けている。

ヤ、ヤバイ！

オレの体は妹の二の腕を掴んだまま、氷のように固まってしまった。

な、何か言い訳しなくては…、ば、ばか。冗談に決まってるだろ。お前もそんなことが分かる年頃になっただんな…

いや、まずい。それでは、この行為をセクハラ行為と認めてしまうことになる。

何か、何か別の、世間様が納得するような、言い訳……

くく、思いつかん（この間約0・2秒）

「その、0・2秒とかも聴こえてるし…、しかも実際0・2秒じゃないから」

「……」

「どうしよつかなく？ このこと、お母さんに言っちゃおつかなく？
そ、それは困る。妹よ、兄は、兄はただ、おっぱいへの感触に、
ただただ近づきたかっただけなんだあああああ！

「へへ、そうなんだ」

え？ あ！ これも聴こえてんのかあ！？

「あゝあ、何だかノド渴いてきたなゝ、コーラでも飲みたいなあゝ」
そうだな、オレもノドがカラカラだ別の意味でだが。でもうちの
冷蔵庫にはコーラなんて上等な物は入っていない。あるのは麦茶くらいだ。

「何やってんの？」

立ち尽くしたままのオレにさらに妹が怖い顔をして詰問する。

何って、何も……

「買って来て！」

「へ？」

「お母さんに言いつけてもいいの？ 早くコンビニでも行って買ってきてよ」

「よ、よろこんでえ」

オレは慌てて玄関へ向かう。中二の妹にアゴで使われる羽目になるとは……

「ああそうだ、ついでにポテチも買って来て、のりしおね！」

なぬ！？ ポテチはノドの渴きとは関係ないんじゃない……

「それも、聞こえてるよー」

リビングから響く妹の叫び。

「は、はいー、行つてきまーース」

オレは靴を履くのもそぞろに玄関のドアを開け、外へと飛び出した。

*

コンビニの帰り道。

オレは少し遠回りをして夕暮れの海岸通りを歩いた。

世界はオレンジ色に染まっていて、

オレはコンクリートの堤防に飛び乗り、夕陽の沈む水平線を見つめてその上に立つ。

しかし……

しかし、なにわともあれ、オレはやり遂げたのだ。

また一つ、おっぱい道を極め、あの柔らかな感触を手に入れた。

心の中でナレーションが響く。

ゆけ妄想男！ 地球の平和を守るため。

負けるな妄想男！ 真のおっぱいの感触を両手につかむ、その日まで。

クスクスクス…

丁度その頃、犬の散歩をしていた幼なじみの柚姫^{ゆずき}が、笑いかみ殺しながらオレの背後を通っていたことに…

そのときのオレは、まったく気付いてはいなかった。

放課後の屋上へ校舎の上のダザイズムへ

放課後の屋上の出入り口の上に、給水タンクがあつて…
少女が一人立っていた。

少女は美しい立ち姿で凜と背筋を伸ばし、手を大きく横に広げ、細く尖ったアゴを軽くあげて、瞳を閉じ、給水塔のコンクリーの縁ギリギリに立つ…… って、オイ！

「早まるなあああああ！」

オレは声を荒げて、ブレザー姿の少女の腰に抱きつき、必死に押さえた。

「え！……うわっ」

ビクツとして、振り返った彼女は、驚いた顔つきで開口一番、こう言つた。

「だ、誰？」

そう自己紹介が遅れていた。

僕の名前は、太宰おさむ。この学校に半年前に赴任して美術の教師をしている。

美術教師は目立たない存在だから、僕のことを知らない生徒も多い。そして仕事が少ないのをいいことに余計な雑用を押し付けられ

たりもしている。

今も、放課後の見周りに屋上に訪れて……って。
そんなことより。自殺しちゃダメだ！

「は？」

僕の叫びに彼女は一瞬きよんとして、次の瞬間声を上げ、カラ
カラと笑った。

「な〜んだ。そんなことか」

「そんなことって、なんだ。第一ここは立ち入り禁止だぞ！」

「必死ですね〜 ていうか鍵開いてたし」

「鍵が開いてたら入っていいのか？ じゃあアレか、目の前でおば
あさんが倒れたら拾って交番に届けるのか？」

「……」

「……？」

「いや、慌てすぎですよ！ 家の玄関が開きっぱなしだったからっ
て泥棒に入ってもいいのか？ でしょ」

「そ、その通りだ…… で、いいのか？」

「いや、良くないんじゃないですか。でも開きっぱなしのドアには、
たぶんアヤシ過ぎて、入らないんじゃないかな基本」

「そ、そうか。じゃ、入るな」

「はい」

そう素直に言いうと少女は、再び給水塔の縁ギリギリに立って両
手を広げた。

「だから止めろって！」

僕が声を荒げると少女は

「大丈夫だよ先生。飛び降りたりしないから。こうしてると風が気持ちいいんだ。ほら先生もやってみなよ！」

そう言つて少女は僕の手を取り、屋上の縁に引き寄せた。

僕は少女の隣に立ち。コンクリーの縁ギリギリで背筋を伸ばし両手を広げた。

「……ホントだ！ 気持ちいい」

校舎の中庭から吹き上げる風が柔らかく僕の脇をすり抜けていく。

「でしょ？ わかるでしょ、この感じ」

「ああ」

僕は曖昧に返事をし、再びその感覚を味わう。

「私の名前は、沢下恵梨香。新体操部のキャプテンなのよ。知ってた？」

「……ゴメン」

「私もまだまだだなあ、インターハイで個人3位に入賞したのに、同じ学校の中に私のこと知らない人がいるなんて」

「……いや、僕はあまり、そういうことには疎い方なんで……」

「うん。そうみたいですな」

立ち直りが早い。

僕は再び、屋上の縁から吹き上げる風を受ける感覚を味わう。

「あ、先生。素人は目を閉じない方がいいよ。バランス感覚崩して落ちちゃうかもしれないから」

僕はドキッとして、下を見下ろす。4階建ての校舎の屋上。落ち

たらず即死だろう。

「で、その新体操部のキャプテンが、こんなところで何をしてるの？ 今は中間テストで、部活ないだろ？」

「そ、練習はお休み。でもね、先生……」 恵梨香はそう言うと、僕の顔を見つめた。

彼女の顔は奇跡のように整っていて、美しかった。シンメトリー構造ってわかるかな？ ……とにかくパーツパーツがバランスよく整っていて、絵に書き易い顔立ちだった。今風に言うとクールビューティー …… かな？

「でね、先生。新体操ってね、美を競う競技じゃない？ 審判も人だし、観客も大勢いて、いつも沢山の視線に晒されているの……」
でも、絵に書き易いってことは、情念が伝わりにくいってことだ。表情に乏しいと言うか……

「そんなプレッシャーの中にいつもいるとね。たまには、こう開放的な世界に自分の身を晒しだしたい欲求に駆られるのよね」

ただ、そんな表情が一瞬崩れた感じを表現できれば…… 問題は構図とライティングか…… モチーフに小道具を使うと、意図が見透かされて俗っぽいし、やはり素材をシンプルに活かして……

「…… 先生？」

「…… ん？ ああ、プレッシャーからの開放だろ。でもな……」

「何？」

「君、スカートの丈短かくしてるだろ…… 誰かに下から覗かれたら、丸見えだよ」

僕の言葉に、恵梨香はふふんと鼻を鳴らし、おもむろにタータンチェックの制服スカートの裾を掴み、まくし上げた。

露わになった白い太ももが目飛び込んでくる。

「じゃ〜ん」

若い女の子の生太もも、そしてその付け根には……

「ハ、ハーフパンツ？」

「何期待してたの、このスケベ！」

恵梨香は挑発的に僕の顔を覗きこむ。

「と、とにかくスカートを戻せ」

「恥ずかしがるんだ……先生なのに。でも、先生リアクションかわいいから、これ取って上げてもいいよ！」

「ば、ばかつ」

「え〜い！」

そんな、僕の制止も聞かず。恵梨香は突然半パンに手を掛けずり下ろした。

「よ、よせ…… うわああああああ」

「と言ってもその下は、レオタードです。う〜ん……残念ね！」
そう言いながら恵梨香はかわいく舌を出した。

「びっくりさせるなよ、落っこちちゃうだろ」
と胸を撫で下ろしながら言った。

「今日はこのあとダンス教室に行ってレッスン受けるんだ。中間試験っていつでも、わたしもう、推薦決まってるからねえ」

僕らはそんな風に、給水塔の上でひとときを過ごす、はしごを伝って屋上に降りた。

「先生、先降りないでよ！」

僕が先に梯子を降りようとすると、と恵梨香が慌てて言ったので「どうして？」と尋ねると。

「だって、下からスカートの中見えちゃうじゃん！」

「だってレオタードはいてるんだろ？」

「……」

と急にモジモジしだす。

さっきまで、あんなにはしゃいでたのに。

女の子って…… 不思議だ。

「で、まあ、あれだな、危ないから、もう登っちゃだめだよ」

「え〜？ だって気持ちいいのに……」

「ここはさ、金網張ってあって、普段立ち入り禁止になってるだろ」

「うん」

「どうしてか知ってる？」

「知らない。危ないからでしょ？」

「ま、そうなんだけど、実際、人が飛び降りたんだ」

「あ、聞いたことある。私が入学する何年前だ」

「……そう。僕の同級生だったんだ」

「え？ ……そ、そうだったんですか？」

「……うん」

放課後の屋上には傾いた日差しが、コンクリートの床面をオレンジ色に照らしていた。

「仲…… 良かったんですか？」

恵梨香がおそろおそろ聞いてきた。

「うーん。どうだろう。世間話はしたし、一緒に遊んだこともあるけど。仲良かったかどうかは…… 疑問だな」

「その人、なんで飛び降りたの？」

「なんでだろう？ 直接聞いてみたら？」

「え？ 生きてるの？」

「ああ、商店街の呉服屋の若旦那だよ。打ち所がよかつたらしくてねー。一ヶ月ほど入院して、戻ってきたよ。あだ名はターミネーター」

「え？ 笑うところ。ソレ？」

「いや…… ホントの話。笑いにもっていかないと、辛かつたんだよな、みんな」

「ふーん」

「でさ、そいつが言ったんだ。もう二度と、飛び降りないって」「どうして？」

「あんな風に、のた打ち回って、苦しい思いをするのは二度とゴメンだ。だって…… 今度自殺するときは首吊りにしとくよ。ってさ」

「冗談…… なんだよね」

「ああ、そいつなりのね。でも、後から知ったんだけど、心理学では、死に方の願望ってのは、生き方の願望でもあるんだって……」

「これだけは…… って限定すると、人は、自分の中に潜在的に隠れてる本性を晒してしまう。例えば、絶対これだけはなりたくない職業と、その理由を質問すると、その人が本当はやりたくて、でも自分じゃ気付いてない資質を答えてしまうんだ」

「ふーん。私はアナウンサーかな、なんか偉そうに喋ってるけど、

原稿があつて言わされてるだけだもの……で？」

「あ、ああ……で、死と生も、根源的に人間の同じ欲求から生じる行動だとしたら、こんな死に方はしたくないって専門には……」

「こんな風に、生きてみたかった……って、ことか」

「そう。呉服屋なんて、流行らないのに、アイツは必死に営業回って頭下げて、必死に仕事してるよ。儲からないのにね……。でも、街で会った時、汗水流しながら充実した顔してた」

「へー」

「君だつてそうだろ？」

「何が？」

「他人の視線にプレッシャーを感じながら。生きてることに充実感を感じてる」

「え？」

「じゃなきゃ、あんなところに立ったりしないよ」

「そう……かもね」

恵梨香は、その秀麗な顔を少し傾けて考え込むと。はっと目を開き。僕の背中を思いつきり平手で叩く。

「先生。いいこと言うねー」

「痛たたたた。そ、そうか？」

「先生は？　こんな死に方だけはしたくないっての、ある？」

「うーん。そうだな。色々考えたけど。モルモットみたいに実験室に入れられて、何人かの科学者達に、ああだこうだ弄られながら死ぬのは……イヤだな」

「へー」

そう言いながら、恵梨香は透きとおった瞳で僕を見つめる。

「先生さ。美術の先生でしょ」

「そつだよ」

「自分で絵を書いたりもするの？」

「ま、たまにはね」

「じゃ、今度私が暇になったとき、絵のモデルさんになってあげるよ」

「え！？」

「うれしいでしょ？」

「ま、まあ、ありがたいといえば、そうだけど……」

「うれしいくせに。さっきも必死でわたしを止めたじゃない」

「必死で？」

「そう、必死で……」

そう言つて恵梨香はまた、思いっきり僕の背中を平手で叩いてカラカラ笑つた。

「痛たたたた。なんだよ？ 教師を叩くなよ」

「はーい」

夕暮れの校舎の上で、少女の返事がひときわ甲高く、紫色に染まる空へと響いた。

それは、とても透明な空気の中に……。

卒業式のち

卒業式が終わって、誰もいなくなった校舎。誰もいない教室。私は一人そこに戻った。

教室に差し込む、午後の柔らかな日差し。静まって、無機質に並んだ机とイスの群れの中を歩く。そして、特別な一つの前で立ち止まる。

公平……くん。私の親友エミの、彼氏。

この教室で過ごした日々を思い返す。

桜咲き、若葉萌え、枯葉散り、雪が舞う。

巡る季節と私の眼差しの奥に秘めていた想い。

公平くんと仲良くなったのは私の方が先だった。

エミは、たしかに可愛いし無邪気だし、すこし鼻につくところもあったが、甘え上手だった。

女の私でさえ、頼まれると悪い気はしなかった。自分のコノキモちに、気付くまでは。

私は、意地っ張りだ。でも、仕方ない。生まれ持った星なのだ。

公平くんにバレンタインにあげたチョコ。

「義理だよ。エミのほど豪華じゃないでしょ」

風邪を挽いて寝込んだエミに頼まれて、冬の帰り道、大きな紙袋とチャチな包みを渡した。

「ありがとう」と笑ってくれた笑顔。

社交辞令でも、私の望む意味ではないんだと、わかってはいても、気が狂いそうになるくらい、うれしかった。

前の日降った雪が溶けはじめて、ベシヤベシヤの道路。

帰り道、二人の足跡はすぐに消えて見えなくなるんだと、知っていたのに。

公平くんの机に、そつと手のひらを乗せてみる。

ひんやりと冷たい。

あの人は何も知らない。私の3年間。私が過ごした日々。あの人に何も伝えられなかった日々。

ガラガラと音がして。教室の扉が開く。

私はビクツとなる。

振り向くと、教室の入り口に金髪頭で制服のボタンを全て外した

ミツルが立っていた。

「まだ残ってんのぉ？」

ミツルは公平の親友だ。真面目で堅い公平くんが、なぜだかミツルとは仲がいい。

ミツルは良くいえば社交的。普通の見方では、軽薄でチャラチャラして、愛想の良い嘘つきで、楽しければ、面白ければ万事オツケーと思っっている能天気なおバカさんだ。

最悪。今一番関わりたくない奴に見つかった。

「何やってんのぉ？」

そう言っつて、無粋に近づいてくる。

「あれえ？ 公平っちの机じゃん」

そう言っつて。無造作に公平くんの席に座ってしまう。このバカちゃんがああああ。と心の中では叫んでいる。

ミツルはポケットからシャーペンを取り出し、芯を出さずにそこをなぞり、削り始め、公平くんの机に何かを彫り込み始める。

ド　　ン　　カ　　ン　　野　　郎　　！

上目遣いで、ニコツと笑みを見せながら、ミツルは私にシャーペンを差し出す。

「ショコちゃん。^{チヨク}直に伝える気… 無いならココに。この教室に全て置いていこうよ！」

衝撃が走った。

公平くんを、私が好きなこと。おバカのミツルに気付かれていた。私は心を見透かされて、バツが悪くなり、乱暴にシャーペンを受け取り、言葉を彫り始める。

ド　　ン　　カ

文字を彫り込みながら徐々に考える。

この薄っぺらくてで、噂好きで、アゲアゲな男が、誰にも言わなかったんだ。私の思いに気付いてて…

不覚にも私は泣いてしまった。

いつからだろうか？ きつと最近じゃないはずだ。

私は、ミツルの優しさに感謝しつつ、公平くんへの想いのたけを、押さえきれず溢れる涙とともに、懸命に机に刻み込んだ。誰にも気付かれない。どこにも届かないと、わかっていても。

…あなたのことが、好きでした。

ポプラ並木の帰り道。

私は、さっぱりした気分で、その道を歩く。

今日、卒業したんだ。きつと私は。

さつきまで、勝手に隣に着いてきたミツルの馴れ馴れしさも、今だけはどこか許せている。

「シヨコちゃん。街でオレ見かけたら、絶対！ 絶対、声かけてね？」別れ際、ミツルは言った。

相変わらず、うわべだけの人当たりは、すごぶるいい。

「いいよ！ その頃はあんたでさえ懐かしく思えてるでしょ」

私の言葉に対していつも大げさなミツルは、珍しく小さなリアクションをした。

微妙な、はにかんだような微笑みだった。

でも、それもほんの数秒で終わる。

「絶対だよ！ 約束だよ！ オレが綺麗な女の子連れてても、恐れなくていいからね」そういつて、オーバーに手足を振りながら、突然駆け出して、どこかへ行ってしまった。

（アイツんち、あっちだったけ？）

「バイバイ！」

角を曲がって見えなくなったのに、ミツルは遠くで叫んでいる。

（バカだな…… 女連れの男になんて、声かけるわけないじゃん）
ありふれた街角の風景の中、私は一人呟いてみる。

「ドーンカーン！」

もつと遠くでミツルがまた叫んでいる。

私を励ましているのか、からかっているのか、よくわからなかったんだけど……

「あーリーがーとー！」

私は、周りの人の目も気にせず、その声がする方に向かって叫んでいた。

とても大きく。

(J)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2197m/>

作品集「お茶をにごす！」

2011年10月3日19時54分発行